

個人的資料に基づく心理学的研究方法 についての考察

井上知子・三川俊樹・芳田茂樹^{*}

A Study of Psychological Method using Personal Documents

Tomoko INOUE, Toshiki MIKAWA & Shigeki YOSHIDA

20世紀末に近づき、想像もしえなかった程の過剰な物質的豊かさのなかで、人間の持つ価値観、ライフスタイルその他の多様化は必ずしも直接的に人間の精神的健康や日常生活の安寧につながるものとはなりえてはいない。また、科学的技術については人間生活の産業的側面において機械的な面の一大躍進をもたらした結果、予想だにしないような人間性存在での問題点を引き起こすことにもなったことは多くの評論家や研究者の指摘するところである。医学における長足の進歩は不治の病と思われていた多くの病気の治療法を発見し、それに加えて延命の策をも見出した。この医学の進歩はその他の文化的・社会的発展との相乗作用の結果、日本人の平均寿命を世界一にまで引き伸ばし得ることとなったが、この結果も直ちに人間生活に幸福をもたらすものとはならず、新たな問題を生み出すこととなった。例えば、現在の医学では未だその発生や治療法が明らかになっていない病気が数多くあるが、その中でも特に癌の発症率は年々増加しており、医療分野においては癌に対する特効薬や治療法の開発は早急に解決されるべき最大の問題点の一つである。現在の日本の医学の世界では、末期癌患者に対する病名の告知はケースバイケースでしか行なわれていず、告知にいかに対処するかは社会的にも大問題となっている。さらに末期癌患者にたいして、人間としていかに尊厳な生をまっとうさせるべくターミナルケアを行なっていかも解決されるべき大問題である。このような問題に対して対応をするためには、現実の人間の生き様に立脚した上で人の生の意味を改めて問い直す必要があり、さらに進めて、人間はいかに生きてきたか、また現在生きているか、これからいかに生きていくべきかという問いかけに対して答えを与えるべく研究をする必要がある。このような研究は当然一学問の中だけで解決しうような簡単なものではなく、

^{*} 大手前女子短期大学講師
追手門学院大学文学部心理学科非常勤講師

医学、心理学、社会学、哲学その他の学問領域が有機的に協力して、学際的に取り組まなければ解決の望めないものであるといえよう。

このような問題意識に立って考えようとするとき、「ひと」の「こころ」に対して心理学はどのように取り組むことができるのであろうか。

現在、心理学で用いられている方法を概観するとき、まず気づくことはその研究の領域や目的の如何を問わず、用いられている方法に自然科学的な方法と人間科学的方法という大きな対立があり、しかもいずれの方法であれ数量的アプローチがその主流をしめているのが現状であるということである。しかし、たとえ顕在的にしろ潜在的にしろ、人間の意識的現象や行動、もっと広義にいうならば人間のあり方やあるいは生き方を問うためには、数量的アプローチですべてが解決されるとは考えられていないことは研究者の多くが認めるところである。このような問題意識における変化の結果は本明(1989)の「「ひと」への現象学的研究法の再確認と、人間問題への具体的、現実的解決、すなわち人間の「こころ」へのあたたかい眼ざしと手、が脚光を浴びるようになった」という指摘にみられるように、人間学的心理学において用いられてきた方法が、改めて見直されることとなった。人間学的心理学での方法とは単に数量的アプローチだけではなく、質的アプローチおよび考察を取り入れていることを意味している。理由は明らかではないが、ここ数年間に刊行された出版物をみると、人の個人的な資料およびそれに類する資料に基づく研究成果の報告が多く見られるようになった。特に1989年に出版された『性格心理学 新講座』の第六巻、「ケース研究——個性の型態と展開」と題されて出版された本において、典型的な生き方をしたと思われる個人について夫々の個性の分析が集録報告してあることは現在の研究方法的な方向における試験的試策を如実に示しているものといえよう。しかし、このような方法は、心理学の中ではとりわけ新しく開発された方法ではなく、1930年代にすでにBühler, Ch.を中心にしたウィーンの一派による研究成果が、Der menschliche Lebenslauf als psychologisches Problemという題で報告されている。さらに、1942年には、Allport, G.W.により、The Use of Personal Documents in Psychological Scienceと題する本により個人的資料の利用法について広範な考察がなされている。日本においても1943年には、佐藤幸治が心理学研究に「人間生涯の心理学的研究について」と題してBühler的な方法での研究を報告しており、後年には人生心理学の名の基にこのような方法での研究を進めていたが、残念ながら、成果をまとめる用意をしている段階で他界したため未完成のままとなった。筆者自身も1967年に女性の生き方について発達的研究をしたさい、横断的なアプローチによる統計を駆使した量的分析に対する疑念から、その補助的方法として自叙伝を中心とした個人的資料による生涯研究を行ない報告しているが、1989年より学生達とともに演習をするなかで、心理学における個人的資料の利用法について改めて考察する機会をもつこととなった。そこで本報告において、特にパーソナリティに関わる研究方法とし

ての個人的資料の利用法について、検討してみよう。

(1) Bühler, Ch. による人間生涯の心理学的経過に関する研究

Bühler, Ch. を中心とする一派は、人間生涯の心理学的研究として、個々人の生涯を追跡して典型的ないくつかの生涯の構造を明らかにするための、広範な研究を進め、相当な成果をあげた。ここでは、佐藤 (1949) の発表した Bühler 夫人らの伝記心理学的研究に基づく報告を基にして、その方法をまず概観していくことにする。

ウィーンでは、各国、各職業、各階級にわたる約 400 の伝記があつめられ、歴史家、文芸史家、音楽家、音楽史家、医師、統計家など各方面の人々の協力により、研究が進められたのである。研究には日記や、手紙その他の書類もできるだけ利用された。生存者に対しては、直接質問の方法もとられ、養老院や田舎にまで出かけて資料は集められたという。これらの生活史は個々に分析され、統計によって互いに比較されている。資料が集められたのは、次の 3 方面からである。

① 事蹟 すなわち、生涯の外面的な出来事であり、その人の行動である。ここでは行動の「次元」に焦点があわされているが、これはその人の積極的に参加した活動領域である。その例として、実際の次元としては研究とか、職業とか、創作とかが、また社会的次元としては、家庭や、交友や、他に対する援助など、その他の次元としては、スポーツとか、旅行や趣味的活動や宗教活動などがあげられ、すべてで 97 の次元が区別されている。

② 体験 すなわち、出来事に対する内面的な反応を意味する。資料は手紙や、日記や、自叙伝的な覚書や、あるいはこれらの体験についての直接の質問によるものである。内容としては、かれらの運命が幸福であったか、不幸であったか、人生の目標が見出されたかどうか、かれらのなしたいと思ったこと、なさねばならないと思ったことはどんなことであったか、などが含まれている。

③ 業績 創造的な仕事、その他の人々に与えた影響、その成否などであり、これは質、量の両面に注意しながら、統計的に処理し、図示することができるものである。業績の例としては、作品や作曲の数とか、発明の数、俳優の出演回数、外科医の手術数、政治家の演説数、選手の記録、登山家の登山数などがあげられている。

ウィーンの研究ではこれらの資料をもちいて人間生涯にわたる心理学的な発達をたどり、その間における法則性を決定しようとしたのである。さらにこのような生涯を通しての法則性を目指すとともに、各年齢についてその心理学的事象を概観しようとし、さらにまた、各種の典型的状況においていかなる行動あるいは体験の様式が見られるかを究明しようとするものでもあるので、これは人間の生き方について教えられるところが特に多いといえる。佐藤によれ

ば、ウィーンでの研究は上述の点を重視したために、環境による変化の面があまり問題にされていないところに問題点があるとの指摘がされている。

さらにもう少し具体的に Bühler 夫人達の研究を概観してみよう。

Bühler 夫人は、まず、生物学的に人間生涯を区分した。そのために、人間生涯を区分する方法として、Weissenberg の生長期、安定期、衰退期に分けるものと、Durand-Fardel の生殖の有無によって未だこれを有しない時期とこれを有する時期とこれを失った時期とに分けるものを組み合わせて人間生涯の生物学的基礎図式として次の 5 期に分けている。すなわち、第一期（15 歳まで）、第二期（15 歳～25 歳）でこの 2 期は生長期とされ、続いて第三期（25 歳～45 歳）、第四期（45 歳～55 歳）、第五期（55 歳～）で第四期と第五期は衰退期であり、それぞれ二分されるのは生殖能力の有無によってであるが、これは一般図式であってその限界は男女によって相違し、また個人によっても相違はあるとしている。体験、行動または事蹟、業績などの伝記的段階もこれに関連してたどられるが、生物学的基礎図式にたいして若干ずれ後れを示すのが通例であるといわれている。

この生物学的基礎図式は 1933 年に作られたものであるので、約 60 年を隔てた現在にそのまま適用することは不可能であるが、この方法は参考にするには非常に有効であるといえよう。

続いて、Bühler 夫人達は事蹟または行動の面、体験の面、業績の面より生涯の経過とその段階についての検討をし多くの資料を駆使しながらそれぞれの面での特徴的な法則をあげている。体験の面を例をとって、生涯の各段階の特徴をどのように取り上げたかを見てみると、次のようになる。

第一期は未だ人生の標定に対する深い関心のない時期であるが、第二期はその人生における最初の計画をたて、最初の決断をなす時期である。その第一の特徴は現実との接触を得たいということであり、人々や職業について実験を行ない、自我の拡大が生ずる。自分の天職が何かについては未だ判明せず、職業態度も一時的性質をもったものである。第三期には生命力はなおその高調にあり、決定および特殊化もすでに存在するので、この時期は体験においても最高の時期になる。第四期への移行には危険が見られることが多い。個人の力の開展は停止するに至り、生物学的欲求や、体力に関するものは放棄されるが、なお人生の成果や生産性に対する新しい関心によって上昇の面も見られる。この時期に自己の能力を評価させるならばそのきわめて少数のもの、しかもたいてい彼の職業と関係するものを挙げる。第五期には年齢や死の予感や、寂寥の訴えなどがおおくなり、また宗教問題に関する瞑想なども非常にしばしば見られる。またこの時期は回想的な経験や将来の死などについての思いが多くなり、回顧録や自叙伝などを書くようになる。

以上が、体験の面での各段階の特徴であるが、しかし、これらの体験のすべての段階がどの個人にもあるとは限らないことは当然である。

このように Bühler 夫人らは人間生涯の心理学的研究を広範囲にわたって行ない、それらの結果から、実際の応用を考えて次のようにまとめている。

- ① 人生における経路の選択に関する問題について、すなわち経路を選ぶのにもっとも好都合な時はいつか。種々の生涯の段階における職業の変化をいかに考えるべきか。経歴を正常に発展せしめるためには何をなすべきか。
- ② 人生における健康と病気の問題について、および正常あるいは異常な精神発達の医学的問題について。種々の病気が生涯および経歴にいかに関与を及ぼすか。
- ③ 労働の不能または生の倦怠に関して、公の福祉のために。自殺やその原因の問題、種々の年齢における失業の影響の問題、これらの影響と闘う効果にかんして資料が集められた。
- ④ 短命や長命を研究することによってその生活様式から生涯の長さに関する決まった指標があるように思われる。
- ⑤ 結婚の適齢に関して。結婚へのアドバイスにおいてはある年齢の生に対する態度の知識が、結婚の永続性、および予定されたまたは現存している結婚の適合性を判断するために、きわめて価値があるということが判る。
- ⑥ 引退の時期について。

以上の Bühler 夫人が挙げたものは、現在にすべてが叶うものではないが、かかる視野から、人間の生涯について検討し考察するというこの方法論は、この世紀末の時代にいかに関与すべきかという冒頭で言及した問題に対して取り組むために非常に示唆に富んでいるものといえる。

(2) 西平 直喜の提案した青年期の伝記分析的方法

青年心理学においては、その時期の現象の把握が非常に難しいことから、種々のアプローチが試みられている。

依田新 (1963) はその著青年心理学の中で付録としてではあったが、下村湖人の『次郎物語』、ヘルマン・ヘッセ作『車輪の下』および『デミアン』、ケラーの『緑のハインリッヒ』を題材にとりあげ、小説に見られる青年像についての分析を行ない、或る所与の時代を生きた青年の姿を浮き彫りにすることにより、このような方法の有効性を明らかにしている。

西平は“従来、青年心理学で伝記を基礎資料に展開した研究は、ほとんど見当たらないが、それは方法論的に、現象学的方法が市民権をえていなかったという事情による”ものであるという指摘を行ない、文献的にまず研究成果の検討を行なった。その結果、フロイド、ヤスパース、エリクソン、サルトルなどの諸業績によって、その可能性を予測し、特に、エリクソンの“*Young Man Luther*” は世界史的人間ルターを青年期に焦点をしばって分析した画期的な

文献であり、この領域での、唯一のモデルを提供したものと高く評価している。さらに、青年期に限定しなければ、フロイドの『ドストエフスキー論』、『ウッドロー・ウィルソン』、『エリクソンの『ヒトラー』、『ガンジー』、『バーナードショー』の精神分析、サルトルの『ボードレール』、『聖ジュネ』の実存精神分析、ヤスバースの『ストリンドベルヒ』、『ゴッホ』の精神病理学的分析などがあり、最近はバトグラフィとして『夏目漱石』、『宮沢賢治』、『ヘミングウェイ』ほか多数のものが出され、他に、天才論や狂気論もあることを報告した。

そこで、西平は青年心理学の視点から伝記分析的手法として、① 個別的分析、② 比較伝記的分析法、③ 主題分析的手法、④ 精神発達の手法の4方法について、実際に例示しながら、それぞれの方法の検討をおこなった。

西平のこれらの方法での最大の特徴は、統計的なアプローチはいっさい用いず、サンプリング的発想も有意差検定的発想もとらないこと、個人の伝記を、青年期に焦点づけて、サイコ・ダイナミックスと青年期の全人生の中での意味を追究することであるといえる。

西平は伝記分析の青年心理学的枠組として、青年の全生活空間を客観的側面（外的条件）とし、青年の自我同一性の様態を主観的側面（内的根拠）として、記述し了解していった。この理論的枠組としては次のように想定されている。

青年の全生活空間の理論的枠組

- ① 家族関係 家系、家族星座、両親の性格特性・しつけ方、心理的離乳の状態、同一視、近親者の死亡、家族の不和、養子縁組、エディプス葛藤を形成する可能性。
- ② 経済的諸条件 両親の職業・家計状態、進学就職の可能性、所属する階層、浪費的かまへ、経済的に独立した時期、父の死亡、失職、破産などによる経済的変動。
- ③ 身体的諸特質 幼少児からの病弱－強健さ、遺伝的体質と精神病質、成熟の早さ遅さ、運動能力および活動性、疲れやすさとエネルギーな体力、身体的見え（容姿容貌）。
- ④ 一般的対人関係 基本的対人関係の型、交際範囲と種類、友人関係、集団所属のあり方、異性関係（恋愛、性的交渉）、他人への影響力（人気、知名度）
- ⑤ 能力・創造性 特殊能力の発現時期、早熟性、天才性、幼少時の訓育、良い指導者との出会い、青年期のモラトリアムや動機づけ、集中力と持続性。
- ⑥ 歴史的・文化的な環境条件 当時の歴史的状況、社会意識の文化と葛藤、価値の分裂－統合のあり方、保守革新性の力関係、文化全体の疎外状況と健全さ。

青年の自我同一性の様態

- ① 社会・人間・人生に対する基礎的信頼感 適応能力、順応、協調、依存、孤立、閉鎖、反逆、革命性などの諸形態をとって表現される信－不信の態度。

- ⑥ 自己概念および自我感情 自信と劣等感、IとMeの一致不一致、傷つきやすさ、ナルシズム傾向。
- ⑦ 自我の心理力動性と Ego strength 取るメカニズムの型（退行、転移、逃走、攻撃、同一視、摂り入れ、昇華、反動形成、打ち消し）、フラストレーション・トレランス、禁欲性と快楽追求、強迫性。
- ⑧ 支配的な気分・生活感情 不安、感動、焦燥、感傷、孤独感、空虚感、ロマンチズム、ルサンチマン、エリート意識、貴族趣味、革命的情熱、ニヒリズム。
- ⑨ 時間的展望 未来への志向（夢と人生設計）、楽天的－悲観的、世界（地球）の滅亡不安、文化向上の希望。

西平は上述の二つの視点によって、伝記資料を青年心理学的に整理し統合していこうとしたが、青年のすべての心理現象や行動を、以前からの主張に沿って、「人間の精神発達的一位相としての『青年性』として」、「現実社会の歴史的現象における表現形態としての『世代性』として」、「生育史的にも主体的な自己投企としても、普遍性を越えた個としての『実存性』として」という三契機の有機的な相互関連の中で把握していこうとしている。

個別分析の手法は上述の二側面から一個人について資料を整理分析して、全生活空間と自我同一性の様態とを統合して記述していく方法であり、比較分析法は、なんらかの類似性・共通性と異質性・対照性をもつ二人物の伝記を比較記述し、生育史を取り出して、人間形成の内的機制を探究しようと試みる方法である。この2方法に対して主題分析の手法は青年心理学での特定のテーマ（青年心理学的諸概念）について、伝記に基づいて分析をする方法である。青年心理学の主題としては、モラトリウム、ナルシズム、生活感情（孤独感、感傷、不安）、時間的展望、諸メカニズム（反動形成、転移）、反抗、劣等感、セックスに対する構え、ライフ・スタイル、エゴ・ストレングス、職業的アイデンティティ、感激性、社会態度、生きがい感その他が考えられるが、西平は心理・社会的モラトリウムを例題としてこの手法の説明を行なっている。精神発達の手法のためには、青年期を中心にした人格形成の機序に対する基本的な問いをまず根底に持ち、それらの問いに対して、納得－説得の段階を経て、会得的な結論を得るために行なわれる必要があるといわれている。

人格形成の機序に対する基本的問いとして西平が列記したのは、次の5項目である。

- ① 人格形成は、いつ、どのような条件によって、どのような機序をもっておこなわれるのか。
- ② 青年期以降に、個人的意志や教育によって性格は変えられるものなのか。
- ③ 「健康なパーソナリティ」は、どのような諸特質をもち、またどのようにして形成されるのか。

- ④ 歴史は個人にどれだけ影響を与え、個人は歴史にどれだけ働きかけうるのか。
- ⑤ 人間にはどれだけの発達可能性が宿っているのか、どのような生き方が理想的なのか。

(3) 心理学における個人的資料に基づく方法に対する考察

1 個人的資料の問題点

ここで対象としている個人的資料には伝記だけでなく、自叙伝、日記、書簡、手記、文学作品、人物評論、その他質問紙、逐語的記録や芸術的作品までもも含んだ広い範囲での資料を扱おうとしている。これらは、当然のこととして、心理学的な資料としての価値に相違がある。西平は今井登志喜が歴史学的視点で行なった分類を基にして、① 個人が書き残した日記・書簡・手記は一等資料に該当し、② 後年に書いた自叙伝(随想録、想い出)は二等資料、③ 一般の伝記は三等資料、④ 自叙伝的文学作品および人物評伝は四、五等資料と分類している。しかし、この分類は外的な相対的なものであり、何を分析しようとするのか、あるいは何のために分析するのというかことによって、実証性の程度は決められるものであるといえる。

2 Allport, G. W. による個人的ドキュメントの利用法について

Allport, G. W. によれば、個人的ドキュメントは、個人の生活の構造と力動についての情報を、意図的にしろ無意図的にしろ、明らかにするような、自由に書かれた記録であり、個人的ドキュメントの利用に対しては多くの批判がなされている、そのうちのあるものは、十分根拠のあるものであり、あるものは不適切な、もしくはとるにたらないものであり、さらにあるものは、採用するドキュメントの類型、ならびに、適用する利用法の種類しだいで当否の変わるものであると指摘している。

Allport があげた批判とは次のようなものであった。サンプルの非代表性(個人があえて自分の心的過程やパーソナリティについて語ろうとするのは少数の人々だけにすぎない。青少年時代に日記をつける人は無数にいるが、おおくの人はその日記を提供してくれず、研究者が入手できるものはごく限定されている)、非客観性(個人的資料は主観的なデータである)、妥当性を評価することができないこと、欺瞞(もっともらしい陳述は、無意識の合理化から故意のごまかしまでいろいろの欺瞞がある)、自己欺瞞(無意図的な自己正当化の問題)、動機に対する盲目性(人は自分自身の動機を適切に報告することはきわめて困難である)、過度の単純化(書き手は、未解決のなぞや、目に見えるすき間や、説明されない行動を嫌う)、気分の影響(非信頼性)、記憶の誤謬、黙示的な概念化、概念化の恣意性、稀少性と不経済、非科学性の12項目をあげた。さらに、それらの批判を三つのグループにわけている。すなわち、第一のグループは、個人的ドキュメントはその本性そのものからして、客観的でなく、妥当性に欠け、信頼できないものであるという非難である。この批判に対

して、Allport は“なるほどそれらは客観的ではないかもしれないが、にもかかわらず、しばしば、妥当なものであることが示される。妥当性の基準には、様々な統計学的な技法（たとえば、自叙伝体のデータの評価と独立の資料源から相関性がひきだされること）もあれば、内的一貫性や、もっともらしさや、その筆者のあらかじめ知られている信頼性や非数量的な独立の証拠などの、検定もある。客観的でないという非難は、それが様々な気分の影響についていわれているのでないかぎり、なんら特別の意味を持たない”と反論している。第二のグループは、いくつかの不確定なものに対する批判である。Allport は、このようないくつかの批判について検討した結果、しかし、これらのものは致命的なものとはみなしえないと結論づけている。批判の最後のグループは、書き手や解説者によってなされる概念化が恣意的であり、あらかじめ決定されているという非難がふくまれる。Allport はこれにたいして“たいていのばあい、ドキュメントは、書き添えられる解説や解釈から、その意味とわかりやすさをうけとるものであるように思われる”として解釈をするさいに気を付けるべきと暗に示唆している。

これまで、本論文ではパーソナリティの研究方法について、暗々裏に個性を理解することを目的として設定してきたが、人間研究への心理学的なアプローチには、法則定立的アプローチ、パーソナリティにおける男女、人種、年齢層、民族、国籍、階層、所属集団、その他のグループごとの文節的共通性を求めるアプローチ、個性記述的アプローチの三つの方法があり、第三の立場で考察してきたことは言うまでもないことである。それ故、第一、二の立場にたって上述の方法を批判することは、本主旨とはまったく論点の異なる論議であり、別問題であることは言うまでもないことである。

Allport は、個性記述の方法だけでなく、自己評定尺度法、心誌、鑑定、つきあわせ、予測という総括的手法、その他の様々な研究法から特に個性理解に有効な方法を「型態発生的方法」としてまとめたが、星野（1989）によると、方法の未熟さ故になされた批判がいくつかあることを指摘している。たとえば、Harding はアメリカ心理学会のシンポジウムにおいて、「Allport の個人に対する研究は、ほとんど個人的記録の研究に限られている。そこでは個人の自伝が資料として役に立っている。しかし彼自身は、個人からずっと離れた所に立っていて、自分で押してみるとか試してみるとか、おおいをとってみるということは、いっさいしなかった。もし彼がなんらかの意味で臨床家であったら、もちろん、そんな資料で満足できたとは、とても思えない。」という発言をしている。また、小花和（1987）は、Allport の型態発生的方法に対して二つの疑問点を指摘した。「その第1は、型態発生的方法が、検証可能で伝達可能で、予測性能があるべきだという Allport 自身の期待に、どれほど新しい仕方であっているか、彼自身の科学的期待の意味に関する基礎論的考察が欠落している」ことを指摘し、さらに、心理臨床的観点からみると、個性の二人称的関係における共感的理解や現象学的理解が欠如していると批判している。

3 総 括

ここまで、先駆的な研究として、Bühlerを中心とするウィーン一派の業績をかなりの程度詳細に概観し、つづいて、現在のこの分野を代表する方法論であると思われる西平のものについて、検討をしてきた。前者の方法は個人の資料を質的に分析するとともに、統計的方法も併合して使用することによって、どちらかといえば、一般的な法則を見い出そうとする方向で研究が進められているのに対して、後者はすでに述べたように、統計的方法を一切使用せず、サンプリングの発想も有意差検定の発想もとらないところに大きな立場の違いがある。

このように、それぞれの立場に違いは見られるが、個人的資料を利用して、「ひと」の生き方、「ひと」の「こころ」について考察を進めていく方法は、心理学の中ではすでに今世紀の初めから用いられていた方法であるといえる。それが、最近になってあたかも新しい方法であるかの如く脚光を浴びているのにはこの方法にそれなりの利点があり、それが再認識されるようになったためではないだろうか。

個人的資料を使用しようとする時、いかなる利点があるのであろうか。

Allport は「個人的なドキュメントの中には、具体的な個人的生活を考慮するために必要とされる現実性の試金石を見出すことができる」と示唆している。

心理学の方法としては行動観察、面接、調査法、その他種々の方法があるが、主観的な個人の意味（愛、美、恐怖、空想、幸福感、満足感）など、どれをとってみても、今まで頻度高く行われてきた調査的手法での結果の寄せ集めでは十分な理解をすることは不可能であった。これらの主題のためには、個人的資料はまさに生きた多くの情報をいきいきと提供してくれている。この個人的資料が役立つ領域は当然のことではあるが、限定されている。つまり、西平の指摘にもあったように、精神分析、病跡学、パーソナリティ論的心理学、自己または自我心理学、個人心理学などに関わるような精神生活の中心的な分野に焦点をあてている心理学にとって、大きな価値を持つものであるといえよう。

すでに述べたように、例え、外観からのみ見ると、脈絡のない行動をしているように見える時でも、その行動者自身にとっては大きな意味があり、また、一貫性があるということは日常生活の中ではしばしばあることである。そのような内面的精神性は、観察、その他の客観的といわれている方法では理解することはできないのである。

また、現代の心理学では、発達という時、ライフ・サイクルあるいはライフ・スパンという言葉を用いることが非常にしばしばみうけられるようになった。いずれの言い方も、人間の生涯発達を言い表している言葉であるが、生涯発達を考えるためには、研究方法として、横断的アプローチだけでは不十分であり、縦断的なアプローチを使用することが必要とされる。しかし、実際問題としては、数量的には、人間の誕生から死までの縦断的なアプローチはほとんど不可能に近い方法であり、その代わりとして取り得る方法に、個人の資料による分析があ

るといえる。このような研究方法を採ろうとする時、はたして前章で指摘されたこの方法の持つ問題点が、そのまま、この方法の問題点となるのであろうか。筆者は実際に利用してみてそのような感じ得なかったのである。資料そのものがまさに主観的であり個人的なものであるからこそ、その利用者はむしろ第三者的な見方で資料に対峙し分析することが必要とされる場合もあるのである。すなわち前章で指摘されている問題点については、利用の仕方、研究者の問題意識の持ち様、資料に対する考え方、さらに言及するとすれば、資料を利用する人自身の生きざま、あるいは、生き方に対してもっている哲学によって、左右されるものであるといえるのではないだろうか。いずれにしても、個人的資料の安易な利用は、避けて慎まれるべき態度であり、注意深くしかも首尾よく利用することが肝要であるといえる。

文 献

- Allport, G. W., 1942 The Use of Personal Documents in Psychological Science (大場安則訳 1970 心理科学における個人的記録の利用法 培風館)
- Allport, G. W., 1961 Patterns and Growth in Personality, Holt, Rinehart & Winston. (今田恵監訳 1968 人格心理学 上・下 誠信書房)
- Bühler, Ch., 1933 Der menschliche Lebenslauf als psychologisches Problem.
- 星野命編 1989 ケース研究——個性の型態と展開 性格心理学新講座 第6巻 金子書房
- 西平直喜 1983 伝記分析的方法 そのⅠ そのⅡ 青年心理学方法論 第6章, 第7章 Pp 189-262 有斐閣
- 小花和昭介 1987 心理学における事例理解について 追手門学院大学 20 周年記念論文集——文学部篇 53-66
- 佐藤幸治 1943 人間生涯の心理学的研究について 心理学研究 特号 73
- 佐藤幸治 1949 人間生涯の心理学的経過とその段階 東京文理科大学内児童研究会編 児童行動と発達 上巻 第1章 Pp 1-49 金子書房
- 依田 新 1963 文芸作品にあらわれた青少年の心理 青年心理学 付録 Pp 193-251 培風館